

〈原著論文〉

## 長野県松本高等女学校における卒業生の進路

烏田直哉\*

### はじめに

本報告では、長野県松本高等女学校<sup>1)</sup>を対象に、その卒業生進路を検討する。

本研究に関わる先行研究については、拙稿「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」<sup>2)</sup>に示してある通りである。

松本高女は、当初、「松本町立高等女学校」として誕生した<sup>3)</sup>。明治28(1895)年、高等女学校規程が公布され、その後、明治32年に高等女学校令が公布された。その第2条で「北海道及府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スヘシ」、第3条で「前条ノ高等女学校ノ経費ハ北海道及沖縄県ヲ除ク外府県ノ負担トス」と定められた。また、第5条では「郡市町村立ノ高等女学校ニシテ府県立高等女学校ニ代用スルニ足ルヘキモノアルトキハ地方長官ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ府県費ヲ以テ相当ノ補助ヲ与ヘ第二条ノ設置ニ代フルコトヲ得」と定められた。これをうけ、長野県では臨時県会において、長野、松本、上田、飯田の4か所に高等女学校を設置する方針をかためた。しかし、その設置者について、「管理上も経済上も行き届きかねる」<sup>4)</sup>ため、しばらくは県立高等女学校を設けず、高等女学校令第5条を適用した「県立代用」の高等女学校が設けられた。明治33年4月、長野市立高等女学校を県立に代用することとなり、さらに翌34年4月には松本町立高等女学校、郡立上田高等女学校、郡立下伊那高等女学校が開校した。松本高女には「県立代用」の文字が冠されていた。明治40年には、「長野県市立松本高等女学校」と改称され、明治42年には、県立代用であった長野、松本、上田、飯田の4高女は県立に移管された<sup>5)</sup>。

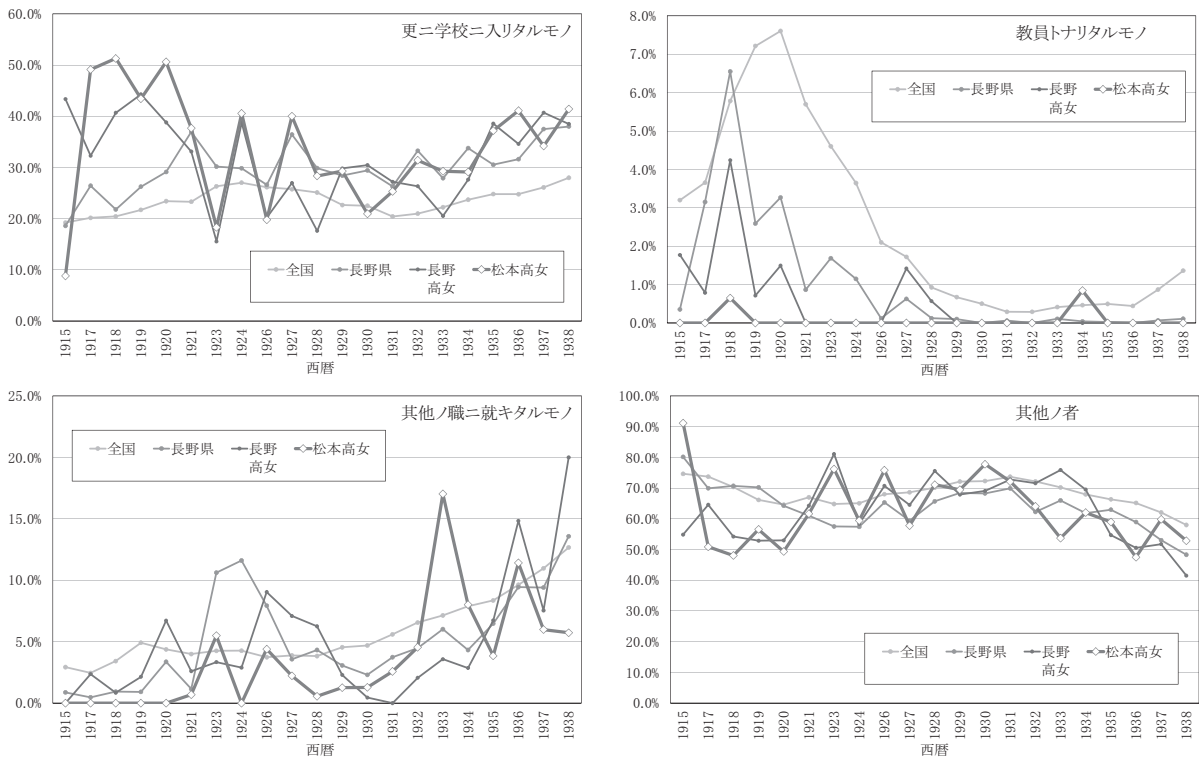
本稿では、旧開智学校や松本市歴史の里所蔵、あるいは筆者が収集した、松本高女同窓会発行の、『報告書』や『会員名簿』などの記載内容に基づいて、同校本科卒業生の進路について分析する<sup>6)</sup>。高等女学校の場合、同窓会名簿の進学先名称が記載されないことが多い。従って、卒業後直近3年ほどの情報に依拠する。

### 1. 全国的にみた松本高女卒業生の進路

まず、全国的にみた松本高女卒業生の進路について検討する。【図表1】は、文部省普通学務局編『全国高等女学校ニ関スル諸調査』から作成した、1915(大正4)年から1938(昭和13)年の卒業後の進路を示したものである。卒業生数に占める進学者や就職者などの比率を示している。「更ニ学校ニ入りタルモノ」の比率について見ると、この間、松本高女において、4時点を除き、全国平均に比べて高い値をとっている。また、長野高女と比べても、21時点のうち13時点で高い値をとっている。「教員トナリタルモノ」の比率は0%の年がほとんどである。

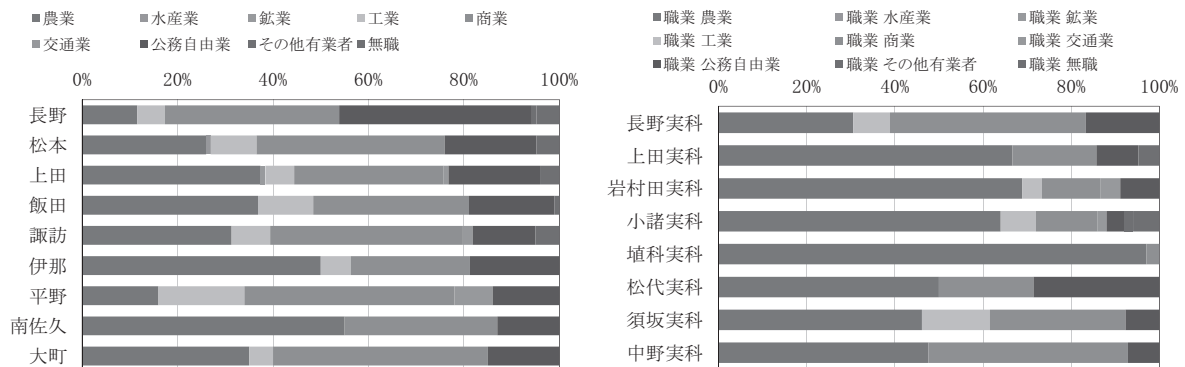
こうした上級学校などへの進学を説明する一つに、親の職業が以前から指摘されている。『長野県教育史』では、「地域の社会構造」<sup>7)</sup>と女子中等教育の要望との関係について、「公務自由業層を中心とする新中間層は、より強く高等女学校の方を志向していたとみられる」<sup>8)</sup>と記述されている。【図表2】の通り、大正9年度の松本高女入学者の親の職業をみると、「公務自由業」が長野高女のおよそ半数で

\* 東海学園大学教育学部



〔文部省普通学務局編『全国高等女子学校一関スル諸調査』、大正5～昭和15年(国会図書館デジタルコレクション)より作成。〕

【図表1】高等女学校卒業者の進路(卒業者数に占める比率)



(長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第三巻 総説編三』長野県教育史刊行会、昭和58年、354頁を基に作成。)

【図表2】「高等女学校・実科高等女学校入学者の父兄職業別(大正9年度)」

ある。それにもかかわらず、松本高女では、「更ニ学校ニ入りタルモノ」が長野高女とほぼ拮抗する、むしろ上回る年が多いことは注目すべき点であると考える。

では、具体的にどのような進路をたどったのであろうか。『長野県統計書』などからも、高女卒業者の進路について状況を把握できるが、これについては割愛し、本稿では松本高女同窓会が発行した『同窓会報告書』や『会員名簿』を用いて、その記載内容から具体的な進路について検討する。

明治期の卒業生進路については、松本高等女学校同窓会編『第四回皇太后御即位報告書』(明治39年7月、旧開智学校蔵)、同『第十一回皇太后御即位報告書』(大正2年8月)の記載内容から検討する。大正、昭和期の進路については、長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿』を用いる。

卒業後の進路に関する情報を『報告書』や『会員名簿』から収集し、整理したものが【図表3】である。発行後数年を経過した卒業生になると、『報告書』『会員名簿』に、卒業直後の状況が記載されなくなる

【図表3】同窓会報告書、会員名簿にみられる卒業後の進路

史料名※	卒業年 和暦	進学・その他の教育機関							就職				結婚等	死去	不明	記載なし	計	
		専門学校・高師	教員養成諸学校	師範学校・その他	その他中等学校	科等	高女専攻科・補習	各種学校等	その他・不明	等	中等学校等教員	小学校教員						その他教育従事
第4回『報告書』 (明治39年)	明治35年	3				1		2		17	1	1		4		1	13	43
	明治36年				1					14		1		3		2	26	47
	明治37年	3				29	4	4	1	3		1		2		5	16	68
	明治38年	2		1		38		6		5				5		1	18	76
	明治39年	1		2		43				1		1		1		1	33	83
第11回『報告書』 (大正2年)	明治44年	2						1		7	2						74	88
	明治45年	4	6			10		2		10							87	119
	大正2年		5	1		33		2									75	116
『同窓会会員名簿』 (大正8年)	大正6年	6	6					1		8		1	1		2		146	171
	大正7年	5	4			24		1		2					1		117	154
『会員名簿』 (大正11年)	大正9年	13	2	1				3		2					1		136	158
	大正10年	6	5	2				4							1		128	146
	大正11年	6	3	1		45		4									98	157
『会員名簿』 (大正15年)	大正13年	7	4			28		2		5		1			4		127	178
	大正14年	6	19			23		1	1	1		2			5		116	174
	大正15年	8	17			26											131	182
『会員名簿』 (昭和4年)	昭和2年	13	3			15		2							2		100	135
	昭和3年	11	6			20		3					1		1	1	137	180
	昭和4年	13	9	1		17						2	1		1	1	193	238
『会員名簿』 (昭和7年)	昭和5年	4	2	1		12		2		10	1	1			4	2	195	234
	昭和6年	10	7	2		21		1	1				1				190	233
	昭和7年	7	6	1		15						3	2				206	240
計	130	104	14		400		33	14	1	85	4	14	6	15	24	14	2362	3220

※表中「史料名」は、以下の史料を略記した。

『第4回『報告書』(明治39年)』=松本高等女学校同窓会編『第四回<sup>自三十九年五月</sup>報告書』(旧開智学校蔵)、明治39年7月、13-36頁

『第11回『報告書』(大正2年)』=長野県立松本高等女学校同窓会編『第十一回<sup>自大正元年八月</sup>報告書』、大正2年8月、35-44頁

『同窓会会員名簿』(大正8年)』=長野県立松本高等女学校同窓会編『大正八年三月 同窓会会員名簿 附索引』、大正8年5月、46-55頁

『会員名簿』(大正11年)』=長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿<sup>(大正十一年)</sup>』(松本市歴史の里蔵)、大正11年カ、117-140頁

『会員名簿』(大正15年)』=長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿<sup>(大正十五年)</sup>』、大正15年12月、132-154頁

『会員名簿』(昭和4年)』=長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿<sup>(昭和四年)</sup>』、昭和4年12月、143-165頁

『会員名簿』(昭和7年)』=長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿<sup>(昭和七年)</sup>』、昭和7年12月、171-199頁

例が多い。例えば明治39年の報告書の記載内容を見ると、明治39年卒業生については補習科へ進んだ者が43名となっているが、明治35年の卒業生は1名、36年は0である。後にも述べるが、補習科進学を経て小学校教員となったというケースもあった。【図表3】の網掛けの部分に着目すると、おおよその時系列変化を捉えることができる。

## 2. 明治期

### (1) 明治35年～明治39年

明治期の具体的な進路について検討する。【図表4】【図表5】は、明治35年第1回卒業生から同39年第5回卒業生の進学先、勤務先を示したものである。明治39年発行の『第四回<sup>自三十九年五月</sup>報告書』(明治39年7月、旧開智学校蔵)中、「会員の動静(五十音順)」から作成した。「会員の動静」には、卒業年・学科ごとに氏名と若干の近況が掲載されている。

進学、あるいはその他の教育機関へ進んだことが記載してあったものが計140例あり、そのうち8割近くの110例が「補習第一学年」などの記載、すなわち松本高女の補習科である。明治39年卒業生で43名(卒業生83名のうち51.8%)、明治38年卒業生で38名(卒業生76名のうち50.0%)、明治37年卒業生で28名(卒業生68名のうち41.2%)を確認できた。「三月補習科修了上伊那郡宮田小学校在勤」<sup>(9)</sup>、

「三月補習科修了結婚せられました」<sup>10)</sup> など、補習科を経て小学校教員になったケース、あるいは補習科を経て結婚したケースも「高女専攻科・補習科等」に分類した。以下の記述にみられるように、補習科へ進んだ後、小学校教員として勤めたケースが複数みられた。皆、明治37年3月本科卒業生である。

三月補習科修了上伊那郡宮田小学校在勤

三月補習科修了上川手小学校に在勤

三月補習科修了上伊那郡宮田小学校に在勤

三月補習科修了会田小学校に在勤

結婚せられました

三月補習科修了北安曇郡七貴小学校に在勤

三月補習科修了中山小学校に在勤

三月補習科修了山形村竹川区の小学校に在勤

三月補習科修了、松本小学校に在勤<sup>11)</sup>

【図表4】明治35-39年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第1回 明治 35年 卒	第2回 明治 36年 卒	第3回 明治 37年 卒	第4回 明治 38年 卒	第5回 明治 39年 卒	計
専門学校・高師	日本女子大学校	2		3	1		6
	東京歯科医学専門学校				1		1
	東京女子医学専門学校					1	1
	東京高等師範学校	1					1
その他 中等学校	共立女子職業学校				1		1
	東京府立第三高等女学校					2	2
	日本女子商業学校		1				1
高女専攻科・ 補習科等	松本高等女学校補習科	1		28	38	43	110
	長野高等女学校補習科			1			1
各種学校等	香蘭女学校			1			1
	女子清韓語学講習所			1			1
	大成学館			2			2
その他・不明	「修学の為に上京」				1		1
	「女子高等講習会」カ	1		4	5		10
	「渡米せられ修業中」	1					1
計		6	1	40	47	46	140

〔松本高等女学校同窓会編『第四回<sup>自三十八年五月至三十九年四月</sup>報告書』(旧開智学校蔵)、明治39年7月、13-36頁をもとに作成。【図表5】も同じ。〕

補習科について、『長野県教育史』によると、「本科卒業後家庭婦人の養成を主目的とする課程」<sup>12)</sup>として設置されていたと記述されている。本科卒業生が上級学校進学を目指す際の受験準備という意味もあった。また、補習科の2年を終えると教員免許状が得られた<sup>13)</sup>。

【図表5】明治35-39年本科卒 勤務先

卒業年和暦	進路分類	記載内容
明治35年	小学校教員	「塩尻小学校を辞して東京へ参られました四月祖母君を喪はれしとて帰つて居られます」「昨年両親を喪はれ京都より帰りて本城小学校に在勤」「三月松本小学校を辞し郷里へ帰られました」「山辺小学校に在勤四月父君を喪はる」「松本小学校に在勤」「埴科郡屋代小学校に在勤」「神林村小学校に在勤」「諏訪郡岡谷小学校に在勤」「島内小学校に在勤」「南安曇郡梓組合高等小学校に在勤」「明盛組合高等小学校に在勤して居られます昨秋文部省の検定に合格になりました」「和田小学校を辞して東京へ行き兄君と同棲して居られます」
	その他教育従事	「松本幼稚園に在勤」
	その他公務等	「右病院に看護婦として在勤」(「佐々木病院」)
明治36年	小学校教員	「下諏訪小学校を辞して家に在り」「広丘小学校に在勤」「今井小学校に在勤」「松本小学校に在勤」「松本小学校を辞して東京神田区三崎町の大成学館に修業中」「上伊那郡南伊那富小学校に在勤」「上田より帰られて松本小学校に在勤」「諏訪郡高島小学校に在勤」「洗馬小学校に在勤」「筑摩地小学校を辞して上京し大出さんと同じく大成学館に居られます」「島内小学校に在勤」「東京から帰られて岡田小学校に在勤」「東川手小学校に在勤」「北安曇郡青具小学校に在勤」
	その他公務等	「今年四月上京麹町区富士見町六丁目近衛公爵家の奥勤めせらる」
明治37年	中等学校等教員等	「母校の書記として在勤」
	小学校教員	「岡田小学校を辞して家に居られます」「松本小学校に在勤」「北安曇郡北城小学校に在勤」
	その他公務等	「松本郵便局に在勤」
明治38年	小学校教員	「山形小学校に在勤」「松本小学校に在勤」「上伊那郡宮田小学校に在勤」「上伊那郡箕輪小学校に在勤」「中箕輪小学校に在勤」
明治39年	小学校教員	「南小谷小学校の二階墜落の時に軽傷を負はれました」
	その他公務等	「京橋区築地明石町聖路加病院に在勤」

しかし補習科はその後、中途退学者が多いことなどから、大正13年1月16日の県令により、修業年限を2年から1年に短縮されている。さらに、補習科の「教育効果も疑問とみる県当局」<sup>14)</sup>は、大正13年の長野、松本、上田高女への専攻科設置とともに補習科を廃止した<sup>15)</sup>。

専門学校等へ進学した者は9名であった。うち、6名は日本女子大学校へ進学している。その他も皆、東京府へ進学した<sup>16)</sup>。

また、「四月トシヨシを修了し目下上田にてバテンレース修業中」<sup>17)</sup>などの記載が10例認められた。おそらく、以下に示す、松本高女の「女子高等講習会」などかと思われる。

皇三十九年四月記事

(中略)

母校に於ける女子高等講習会には毎度多くの会員が参られます三十八年四月の割烹(山下先生)には同窓会員にて入会せしもの三十一名遊戯体操(知久先生大岩先生)には十一名、三十八年六月の刺繡(植木先生金<sup>(ママ)</sup>には三十八名中十六名、楽器使用法(豊島先生)には十一名三十九年一月の刺繡には三十名、摘み細工(古谷先生)には三十四名参られました今后益々多数参られん事を望みます<sup>18)</sup>

(2) 明治44年～大正2年

【図表6】【図表7】は、明治44年から大正2年の進路である。『第十一回皇三十九年四月報告書』(大正2年8月)の中の、「会員動静(五十音順)」から卒業後の進学先を整理した。

依然として最も多いのは、松本高女補習科進学者であり、通算して43名であった。この報告書発行直後の大正2年卒業者をみると33名(卒業生116名の28.4%)であったが、明治44年卒業生にはいない。卒業後、数年を経て、補習科等への進学が記載されなくなったためと思われる。【図表7】の通り、明治44年卒業者は小学校や幼稚園の教員となっているが、大正2年卒業生には勤務先に関する記載はなかった。

なお、この頃から師範学校第二部への進学者が見られる。松本女子師範学校は明治38年に開校されている<sup>19)</sup>。

【図表6】 明治44-大正2年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第10回 明治44年卒	第11回 明治45年卒	第12回 大正2年卒	計
専門学校・高師	日本女子大学校		2		2
	実践女子専門学校		1		1
	東京女子高等師範学校	1			1
	奈良女子高等師範学校	1	1		2
師範学校・その他教員養成諸学校	長野県松本女子師範学校第一部		1		1
	長野県松本女子師範学校第二部		4	5	9
	福岡県女子師範学校		1		1
その他中等学校	松本女子職業学校			1	1
高女専攻科・補習科等	松本高等女学校補習科		10	33	43
各種学校等	香蘭女学校			1	1
	聖使女学院	1			1
	東京裁縫女学校			1	1
	和洋裁縫女学校		2		2
計		3	22	41	66

(長野県立松本高等女学校同窓会編『第十一回皇三十九年四月報告書』、大正2年8月、35-44頁をもとに作成。【図表7】も同じ。)

【図表7】 明治44-大正2年本科卒 勤務先

卒業年和暦	進路分類	記載内容
明治44年	小学校教員	「西筑摩郡読書村小学校在職」「島内小学校在勤」「島立小学校在勤」「同小学校ニ在勤」「同小学校奉職」「同松川小学校在勤」「片丘小学校在職」
	その他教育従事	「松本市聖十字幼稚園」「松本幼稚園」
明治45年	小学校教員	「広丘小学校在職」「坂北小学校在勤」「笹賀小学校在勤」「上記学校在勤」「上記小学校ニ在職」「東川手小学校在勤」「同広津小学校在勤」「同村(里山辺村カ一筆者註)小学校在職」「同穂波小学校在勤」「和田小学校奉職」

### 3. 大正・昭和期

次に大正・昭和期の進路についてである。大正期以降の進路については、長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿』から検討する。大正期には、高等女学校卒業直後に小学校教員になる者は少なく、また、松本女子師範学校第二部が設置されたとは言え、「非常に狭き門」であった。『長野県蟻ヶ崎高等学校百年史』に以下のような記述がある。

大正五年頃から、小学校教員への就職が著しく減少した（中略）この直接的原因は、松本女子師範第二部の設置により、高女新卒者からの小学校教員採用が極端に減ったためであるが、女子師範第二部への入学難もあって、小学校教員への志望自体が急激に減少していったということもあった<sup>20)</sup>

（前略）実質的な高女の上級学校として、松本女子師範学校の二部と、同校に附設された臨時教員養成所があり、主として高女卒業生を収容し小学校本科正教員の養成をしていたが、それらは非常に狭き門であって、女子師範二部の如きは定員四〇名に対し志願者は三倍強の一三五名（大正一三年度）にも上っていた。<sup>21)</sup>

#### (1) 大正6年～大正7年

【図表8】【図表9】は、長野県立松本高等女学校同窓会編『大正八年三月 同窓会会員名簿 附索引』（大正8年5月）から分かる、大正6、7年卒業者の進学先、勤務先を示したものである。やはりこの時期にも補習科進学者が24名と最多であった。専門学校進学者をみると、日本女子大学校や東京女子医専に数名ずつ進んでいることが分かる。

勤務先が分かったのは、【図表9】に示した通り12名であり、多くは「上伊那郡伊那町小学校在勤」「上伊那郡宮田小学校在勤」「上川手小学校在勤」「新村小学校在勤」「東筑摩郡山形小学校在学」「東筑摩郡島立小学校在勤」「同郡本郷小学校在勤」（以上、大正6年卒）など、小学校教員となっている。その他、「花輪病院内」「片倉組大分製糸所」（大正6年卒）などの記載が見られた。

#### (2) 大正9年～大正11年

【図表10】は大正9年から11年の進学先を示したものである。長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿

【図表8】 大正6-7年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第16回 大正6年卒	第17回 大正7年卒	計
専門学校・高師	日本女子大学校	1	2	3
	東京女子医学専門学校	2	2	4
	東京高等蚕糸学校	1		1
	東京女子高等師範学校	1		1
	奈良女子高等師範学校	1	1	2
師範学校・その他教員養成諸学校	長野県松本女子師範学校第二部	6		6
	「横須賀女子師範学校」		1	1
	山梨県師範学校		3	3
高女専攻科・補習科等	長野県松本高等女学校補習科		24	24
各種学校等	東京裁縫女学校	1	1	2
	計	13	34	47

（長野県立松本高等女学校同窓会編『大正八年三月 同窓会会員名簿 附索引』、大正8年5月、46-55頁をもとに作成。【図表9】も同じ。）

【図表9】 大正6-7年本科卒 勤務先

卒業年和暦	進路分類	記載内容	
大正6年	小学校教員	「上伊那郡伊那町小学校在勤」 「上伊那郡宮田小学校在勤」 「上川手小学校在勤」「新村小学校在勤」「東筑摩郡山形小学校在学」「東筑摩郡島立小学校在勤」「同郡本郷小学校在勤」「同小学校在勤」	
		その他公務等	「花輪病院内」
		会社等	「片倉組大分製糸所」
	大正7年	小学校教員	「上川手小学校在勤」「奈良井小学校在勤」

〔大正十一年〕から作成した、卒業後の進学先である。大正11年の卒業生数は157名であるが、そのうち42名・26.7%に「補一」との記載があった。3名は「山脇女学校専攻科在学」との記載であった。

勤務先についてはわずか2例であり、図表に示していないが、両名とも「上伊那郡赤穂小学校在勤」との記載があった。

他の年代の同窓会報告書や会員名簿では、卒業後、数年を経ると就職者が多くなっているが、大正11年のこの名簿からはそのような動きがみられなかった。

(3) 大正13年～大正15年

【図表11】【図表12】は大正13年から15年の進学先、勤務先を示したものである。【図表11】は、大正15年発行の『会員名簿』から作成した進学先である。この時期には、補習科が廃止され、大正13年に専攻科が設置されている。大正12年の通常県会において専攻科設置が決定し、翌大正13年4月から、長野、松本、上田高女に3年制の専攻科が設けられた<sup>22)</sup>。専攻科設置の意図として、「東京方面で修学中の者が一二〇人という女子の向学心」に応えること、あるいは「将来の教員資格取得」<sup>23)</sup>を目指したことなどが『長野県教育史』には記述されている。

また、長野県内には、「高等女学校卒業後の県内教育機関としては、補習科を除くと松本女子師範学校第二部と同校付属臨時教員養成所が存在するのみであった」<sup>24)</sup>という状況であった。こうして、長野高女に国語科、松本高女に家事科、上田高女に裁縫科の専攻科が1学級ずつ設置され、それぞれ40名を募集した<sup>25)</sup>。ただ、長野高女については、中等学校教員資格が文部省から認められず、昭和4年に長野県女子専門学校（文科）が新たに設置された<sup>26)</sup>。

【図表10】大正9-11年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第19回 大正9年卒	第20回 大正10年卒	第21回 大正11年卒	計
専門学校・高師	日本女子大学校	1	5	2	8
	津田英学塾			1	1
	帝国女子専門学校	1			1
	東京女子医学専門学校	6			6
	東洋女子歯科医学専門学校			1	1
	実践女子専門学校	4	1		5
	青山学院女子専門部			2	2
師範学校・その他 教員養成諸学校	奈良女子高等師範学校	1			1
	長野県松本女子師範学校第二部	1	5		6
	埼玉県女子師範学校			3	3
その他中等学校	山梨県女子師範学校第二部	1			1
	共立女子職業学校	1	2		3
高女専攻科・補習科等	成女高等女学校			1	1
	長野県松本高等女学校補習科			42	42
各種学校等	山脇高等女学校専攻科			3	3
	女子音楽学校			1	1
	東京裁縫女学校			1	1
	東京裁縫女学校	3	4	2	9
	計	19	17	59	95

〔長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿(大正十一年)』(松本市歴史の里蔵)、大正11年カ、117-140頁をもとに作成。〕

【図表11】大正13-15年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第23回 大正13年卒	第24回 大正14年卒	第25回 大正15年卒	計
専門学校・高師	日本女子大学校		2	5	7
	津田英学塾	1			1
	帝国女子専門学校	2	1	1	4
	同志社女子専門学校		1		1
	東京女子医学専門学校		1		1
	実践女子専門学校			1	1
	青山学院女子専門部	1	1		2
	東京女子高等師範学校	2			2
師範学校・その他 教員養成諸学校	奈良女子高等師範学校	1		1	2
	長野県松本女子師範学校第二部	2	19	14	35
	東京臨時教員養成所	1			1
	東京府立第一高等女学校保母伝習所	1			1
高女専攻科・ 補習科等	埼玉県女子師範学校第二部			3	3
	長野県松本高等女学校専攻科	28	21	26	75
	長野県長野高等女学校専攻科		1		1
各種学校等	千代田高等女学校専攻科		1		1
	「飯田町高等学院」	1			1
	自由学園	1			1
その他・不明	東京和洋裁縫女学校		1		1
	「名古屋保母学校」		1		1
	計	41	50	51	142

〔長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿(大正十五年)』(大正十五年)月、132-154頁をもとに作成。【図表12】も同じ。〕

このような状況から、松本高女専攻科へ進んだ者が通算して75名と最も多くなっており、大正15年は26名、卒業生182名の14.3%を占めている。ついで、松本女子師範学校第二部へ進んだ者が同じく14名、卒業生全体の7.7%である。専門学校へ進む者は依然として少なく、最も多い日本女子大学校で7名であった。

先に述べた通り、専攻科は将来教員になる者のために設けられた一面もあったのであるが、大正13年卒業生で教員となった者は、【図表12】の通り、5名にとどまっている。

【図表12】大正13-15年本科卒 勤務先等

卒業年和暦	進路分類	記載内容
大正13年	小学校教員	「稲核小学校奉職」「松本小学校井川部ニ奉職」「西春近小学校ニ奉職」「秩父郡大宅村小学校ニ奉職」「同郡寿村小学校在勤」
	その他公務等	「共日病院」
大正14年	小学校教員	「松山第一小学校ニ奉職」
	その他公務等	「赤十字病院内」「東京市芝区白金町伝染病研究所」

## 4. 昭和期

### (1) 昭和2年～昭和4年

【図表13】は長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿(昭和四年)』(昭和4年12月)の情報から得た、昭和2年・第26回卒業生から昭和4年・第28回卒業生の卒業後の進学先である。やはり、この時期も最も多かったのは松本高女専攻科であり通算で51名を確認することができたが、例えば昭和4年の卒業生238名のうち専攻科と確認できたのは17名・7.1%である。また、同じく松本女子師範学校第二部へ進んだ者は9名、通算して17名となっている。専門学校では、前と同じく日本女子大学校が6名と最多であった。昭和4年に長野女子専門学校が設置されたが、通算しても3名と僅かであった。

図表には示していないが、勤務先が記載されていたケースが、数名あった。会社等への就職と思われる記述2例〔「池田屋呉服店」(昭和3年卒)、「土橋鉄工場内」(昭和4年卒)〕、あるいは看護婦になったと思われる2例〔「諏訪赤十字病院内」「日本赤十字社長野支部内」(昭和4年卒)〕の記載があった。「田沢駅官舎」「埼玉県浦和高等学校官舎」などは、おそらく配偶者がそこに勤めたものと思われるが、不明とした。

長野女子専門学校入学者の出身高女については「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」で示した通りである<sup>27)</sup>。同論文でも指摘したが、長野高女の場合、専攻科を発展的に解消して長野女子専門

【図表13】昭和2-4年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第26回 昭和2年卒	第27回 昭和3年卒	第28回 昭和4年卒	計
専門学校・高師	東京音楽学校	1			1
	長野県女子専門学校		2	1	3
	日本女子大学校	1	2	3	6
	津田英学塾	1			1
	同志社女子専門学校	3		1	4
	東京女子医学専門学校	1		1	2
	東京女子専門学校		1		1
	帝国女子薬学専門学校			1	1
	実践女子専門学校	1	1	1	3
	帝国女子医学薬学専門学校	2			2
	日本女子体育専門学校		1		1
	金城女子専門学校		1		1
	女子美術専門学校			1	1
	東京女子薬学専門学校	1	2	2	5
	東京女子高等師範学校	1	1		2
奈良女子高等師範学校	1		2	3	
師範学校・その他教員養成諸学校	長野県松本女子師範学校専攻科	1			1
	長野県松本女子師範学校第二部	2	6	9	17
その他中等学校	共立女子職業学校			1	1
高女専攻科・補習科等	長野県松本高等女学校専攻科	15	19	17	51
	長野県上田高等女学校専攻科		1		1
各種学校等	「関西尼学校内」	1			1
	自由学園		1		1
	女子高等学園		1		1
	東京予備校	1			1
	文化裁縫女学校		1		1
計		33	40	40	113

(長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿(昭和四年)』、昭和4年12月、143-165頁をもとに作成。)



学校を設けたという背景があった。一方で、松本高女の場合、専攻科が存続した。中等教員の資格を取得できるという意味では機能的に大きな違いはなく、長野女子専門学校へ進学する必要性が低かったものと考えられる<sup>28)</sup>。

(2) 昭和5年～昭和7年

【図表14】【図表15】は、昭和5年から7年の卒業生進路について集計したものである。この間、長野県女子専門学校への進学は1名となっており、同県内にありながら専門学校の進学先として選ばれていない。依然として、東京府の専門学校が多く、日本女子大学校がやはり最多であった。師範学校やその他教員養成諸学校としては、これも先に示したものと同様、松本女子師範学校第二部への進学が13名と二桁に上った。全体として最も多かったのは、松本高女専攻科の47名で、92名のうち、半数以上を占めていた。

勤務先と思われる記載としては、【図表15】の通りである。小学校教員が10名、その他、病院、無尽会社などの記載がみられた。

(3) 昭和11年

この後も、長野女子専門学校への進学は僅少であったものと思われる。昭和11年7月に発行された松本高女の『校友

【図表14】昭和5-7年本科卒 進学先

進路分類	進学先学校名称	第29回 昭和5年卒	第30回 昭和6年卒	第31回 昭和7年卒	計
専門学校・高師	長野県女子専門学校	1			1
	日本女子大学校	3	3	3	9
	津田英学塾			1	1
	同志社女子専門学校		1		1
	東洋女子歯科医学専門学校		1		1
	東京女子専門学校		4		4
	帝国女子医学薬学専門学校			2	2
師範学校・その他 教員養成諸学校	長野県松本女子師範学校専攻科	1			1
	長野県松本女子師範学校第二部 <small>(ママ、「梅」カ一筆者註)</small> 「府立女子師範保 侮 科在学」	1			1
その他中等学校	共立女子職業学校	1	1	1	3
	大妻技芸学校		1		1
高女専攻科・補習 科等	長野県松本高等女学校専攻科	12	20	15	47
	山脇高等女学校専攻科		1		1
各種学校等	自由学園	1			1
	女子高等学園	1			1
	東京家政学院		1		1
その他・不明	「昭和女子医専在学」		1		1
計		21	42	29	92

(長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿<sup>(昭和七年)</sup>』、昭和7年12月、171-199頁をもとに作成。【図表15】も同じ。)

【図表16】昭和10年度本科卒業生の  
上級学校入学者および就職者

進路	人数
本校専攻科	25
松本女子職業専攻科	29
松本女子師範	4
松本女塾	4
和洋裁縫学校	1
奈良女子高等師範学校	1
東京女子医学専門学校	1
東京女子薬学専門学校	3
東京薬学専門学校女子部	1
帝国女子医学薬学専門学校	1
実践女子専門学校	3
共立女子専門学校	1
日本女子大学	1
家政学院	1
川村女学院	1
東京文化洋裁学校	1
東京キリスト教女子青年会駿河台学院	1
お茶水家庭寮	2
昭英学園	1
看護婦養成所(日本赤十字) (市営病院其他)	2
片倉普及団	1
郵便局	4
勸業銀行松本支店	1
信州銀行	1
南信無尽会社	1
其他就職者	4
計	100

尚、専攻科卒業生の就職希望者二十五名中小学校に奉職した者は十七名です。(昭和十一年七月現在)  
(松本高等女学校編『校友会報 第八号』松本高等女学校校友会、昭和11年7月、49頁より。尚、漢数字は算用数字に直した。見出し行の「進路」「人数」、「計」は報告者が追記した。)

【図表15】昭和5-7年本科卒 勤務先等

卒業年和暦	進路分類	進路
昭和5年	小学校教員	「下伊那神稲小学校」「下伊那郡河野小学校」「上伊那郡中沢小学校」「上伊那郡春近小学校」「上伊那南向小学校」「上伊那片桐小学校」「西筑奈川小学校」「西筑摩米川小学校」「東筑東川手小学校」「東筑本城小学校」
		「波多学院」※ <small>(ママ、「田」カ一筆者註)</small>
		「日本赤十字病院支部」
		「死亡」
		「東電社宅」「林昌寺」
		「無尽会社在勤」
昭和6年	会社等	「無尽会社在勤」
昭和7年	その他公務等	「京都帝大病院中寄宿舎」「長野赤十字病院内」
	会社等	「西後町無尽会社在勤」「無尽会社在勤」

※「波多学院」については、長野県編『長野県職員録(昭和九年五月一日現在)』(昭和9年、326-327頁)、長野県ホームページ「波田学院」(https://www.pref.nagano.lg.jp/hatagaku/shokai/index.html)を参照。

会報 第八号』(昭和11年7月)中「雑」に「本年の卒業生」が掲載されている。【図表16】は同誌に記載されている進路状況である。「昭和十年度本科卒業生の上級学校入学者及就職者の数左の通りです。」<sup>29)</sup>として進学先や就職先が記されているが、長野女子専門学校進学者は見当たらない。進学の主流なものは依然として自校の専攻科、あるいは松本女子職業学校(市立、甲種実業学校、裁縫手芸染物織物、本科4年、専攻科1年)であった。また、「尚、専攻科卒業生の就職希望者二十五名中小学校に奉職した者は十七名です。」との記述も見られた。

(4) 昭和3年卒業生の履歴

最後に、【図表17】より、昭和3年卒業生を一例として、卒業後の履歴について検討する。昭和3年

【図表17】昭和3年本科卒業生の履歴

No.	昭和3年版『名簿』	昭和4年版『名簿』	昭和5年版『名簿』	昭和6年版『名簿』	昭和7年版『名簿』
1		日本女子大学英文科在学	日本女子大学英文科在学	日本女子大学英文科在学	日本女子大学英文科在学
2		池田屋呉服店	池田屋呉服店	池田屋呉服店	池田屋呉服店
3	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	西筑摩妻籠小学校二奉職	西筑摩妻籠小学校二奉職
4				死亡	死亡
5		女師二部在学			
6	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
7	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
8	東京女子体操学校在学	東京女子体育専門学校在学	東京女子体育専門学校在学		
9	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	本郷小学校奉職	本郷小学校奉職
10			専攻科在学		板橋第二小学校奉職
11	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	岡田村小学校奉職	岡田小学校奉職
12	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
13	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	西筑摩郡新開村小学校奉職	西筑摩郡新開村小学校奉職
14	専攻科在学				
15	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	松本市和洋裁縫女学校奉職	松本市旭町小学校奉職
16	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	朝日小学校奉職	朝日小学校奉職
17	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	東川手小学校奉職	東川手小学校奉職
18				東京本所局在勤	東京本所局在勤
19	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	坂北小学校奉職	坂北小学校奉職
20		名古屋金城女子専門学校在学	名古屋金城女子専門学校在学	名古屋金城女子専門学校在学	名古屋金城女子専門学校在学
21	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
22	専攻科在学	専攻科在学	死亡	死亡	死亡
23	専攻科在学	女師二部在学	女師専攻科在学	下水内秋津小学校奉職	下水内秋津小学校奉職
24		日本女子大学在学	日本女子大学在学	日本女子大学在学	日本女子大学在学
25		東京女子専門学校			
26	女子高等学園在学	女子高等学園在学			
27	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
28				芳川村小学校奉職	芳川村小学校奉職
29	女師二部在学	女師二部在学	死亡	死亡	死亡
30	東京女子薬学校在学	東京女子薬学校在学	東京女子薬学校在学		
31		師範二部在学	北佐久郡中佐都小学校二奉職	北佐久郡中佐都小学校二奉職	東筑筑(ママ)摩地小学校奉職
32		長野女子専門学校在学			
33	実践(「踐」カ一筆者註)女学校専攻科在学	実践女校専攻科在学	実践女校専攻科在学	実践女校専攻科在学	実践女校専攻科在学
34		長野女子専門学校在学	長野女子専門学校在学	長野女子専門学校在学	
35	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	坂生小学校奉職	生坂小学校奉職
36	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
37					東筑里山辺小学校奉職
38	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学		
39	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	西筑摩上松町小学校奉職	西筑摩上松町小学校奉職
40	専攻科在学	専攻科在学	専攻科在学	神林小学校奉職	
41	自由学園在学	自由学園在学			
42			北安曇郡小谷実業学校二奉職	北安曇郡小谷実業学校二奉職	北安曇郡小谷実業学校二奉職
43	専攻科在学				
44		死亡	死亡	死亡	死亡
45		東京女子高等師範保育実習科在学	東京女子高等師範保育実習科在学	東京女子高等師範保育実習科在学	東京女子高等師範保育実習科在学
46	長野高女専攻科在学	上田高女専攻科在学	上田高女専攻科在学		
47		女師二部在学	堀米小学校二奉職	堀米小学校二奉職	死亡
48	女師二部在学	女師二部在学	下伊那郡生東小学校二奉職	下伊那郡生東小学校二奉職	
49		東京女子薬学校在学	東京女子薬学校在学	東京女子薬学校在学	
50		文化裁縫女学校			

専攻科→小学校教員、女子師範学校第二部→小学校教員

(長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿』、昭和3~7年をもとに作成。)

から同7年の『会員名簿』から、進路に関わる記載がみられたケースを抽出した。例えばNo.3の卒業生は、卒業後3年間を専攻科で過ごし、その後妻籠小学校に勤めた、というように捉えることができる。【図表17】から、小学校教員となった者の多くは師範学校第二部よりも自校専攻科を選んだことが分かる。専攻科を経て小学校教員となった者は12名、女子師範学校第二部を経て小学校教員となったケースは4例のみであった。

## おわりに

本稿で明らかになったことを整理する。

一点目は、進学者の多くを占めていたのは自校の補習科、あるいは専攻科であったということである。【図表1】【図表2】に算入されていた「更ニ学校ニ入りタルモノ」には、これが多く含まれていることが考えられる。

二点目は、その補習科、専攻科への進学は、本報告でみた昭和7年頃までに限り、時代を経るに従って減少していったということである。昭和7年においては、9割近くに進路の記載がみられなかった。ただ、昭和11年には若干増加しているためこの後の動向を確認する必要がある。

三点目として、専門学校へ進んだ者は卒業生数の数%に過ぎなかったことが挙げられる。また、長野県内の女子専門学校へ進学するよりも、東京府の専門学校を選択した。「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」で明らかにしたように、長野県女子専門学校は長野高等女学校専攻科を発展的に解消して設置されたという経緯がある。実質的に専攻科同様と考えたなら、あえて長野まで移動する必要はなく、自校の専攻科を選択したものと考えられる。

四点目は、小学校教員となった者は、同じ市内にあった女子師範学校第二部よりも自校の専攻科を経たケースが多かったことである。競争率の高かった師範学校よりも自校の専攻科を選んだ結果と考えられる。

五点目として指摘できるのは、長野高等女学校と同様、中等教員の資格を得ながら、多くは小学校教員となったことである。

## 註

- 1) 学校名は「松本町立高等女学校」から「松本市立高等女学校」へ、さらに「長野県松本高等女学校」と変更された。同校を以下、「松本高女」と表記する。なお、本稿で史料を引用する際は、人名などを除き、旧字体を新字体に改めた。また、引用・参照する著作や史料の発行年については、奥付表記のままとした。
- 2) 拙稿「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」東海学園大学スポーツ健康科学部教育研究紀要委員会編『東海学園大学教育研究紀要』第7号、2022年、28-42頁参照。
- 3) 以下、明治20～30年代の高等女学校設置については、長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第二巻 総説編二』長野県教育史刊行会、昭和56年、467-473頁を参照した。以下、同書を引用・参照する際は、「『長野県教育史 第二巻』、467-473頁。」と略記する。
- 4) 『長野県教育史 第二巻』、469頁。
- 5) 長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第三巻 総説編三』長野県教育史刊行会、昭和58年、314-315頁参照。以下、同書を引用・参照する際は、「『長野県教育史 第三巻』、314-315頁参照。」のように略記する。
- 6) 本稿で用いた史料は以下の通りである。

- 松本高等女学校同窓会編『第四回皇統親親報告書』、明治39年7月（旧開智学校蔵）
- 長野県立松本高等女学校同窓会編『第十一回皇統親親報告書』、大正2年8月
- 長野県立松本高等女学校同窓会編『大正八年三月 同窓会会員名簿 附索引』、大正8年5月
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（大正十一年）』、大正11年カ（松本市歴史の里蔵）
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（大正十五年）』、大正15年12月
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（昭和三年）』、昭和3年12月
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（昭和四年）』、昭和4年12月
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（昭和五年）』、昭和5年12月
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（昭和六年）』、昭和6年12月
- 長野県松本高等女学校同窓会編『会員名簿（昭和七年）』、昭和7年12月
- 松本高等女学校編『校友会報 第八号』松本高等女学校校友会、昭和11年7月
- 7) 『長野県教育史 第三巻』、353頁。
  - 8) 『長野県教育史 第三巻』、353頁。
  - 9) 松本高等女学校同窓会編『第四回皇統親親報告書』、明治39年7月、21頁。以下、同書を引用・参照する際は、「『第四回報告書』、明治39年7月、21頁。」のように略記する。
  - 10) 『第四回報告書』、明治39年7月、23頁。
  - 11) 『第四回報告書』、明治39年7月、21-24頁。
  - 12) 『長野県教育史 第三巻』、330頁。
  - 13) 『長野県教育史 第二巻』、475頁参照。
  - 14) 『長野県教育史 第三巻』、331頁。
  - 15) 『長野県教育史 第三巻』、331頁参照。
  - 16) 「東京神田区三崎町歯科医学院に在学中」（『第四回報告書』、明治39年7月、30頁）との記載は、後の東京歯科医学専門学校と判断した。東京歯科医学院時代には女子も在籍していた〔東京府庁編『第十八号東京府統計書 全』、明治40年、149頁参照（国立国会図書館デジタルコレクション）〕。
  - 17) 『第四回報告書』、明治39年7月、26頁。
  - 18) 『第四回報告書』、明治39年7月、3-8頁。
  - 19) 「文部省告示第八十一号」『官報』5639号、明治35年4月25日、553頁。ここに、「長野県松本女子師範学校ヲ長野県東筑摩郡松本町大字北深志字桐ニ設置シ明治三十八年四月ヨリ開校ノ件認可セリ」とある。
  - 20) 長野県松本蟻ヶ崎高等学校百年史刊行委員会編『長野県松本蟻ヶ崎高等学校百年史』長野県松本蟻ヶ崎高等学校創立一〇〇周年記念事業実行委員会、平成14年、106頁。以下、同書を引用・参照する際は、「『蟻ヶ崎高等学校百年史』、106頁。」のように略記する。
  - 21) 『蟻ヶ崎高等学校百年史』、127頁。
  - 22) 『長野県教育史 第三巻』、331頁参照。
  - 23) 『長野県教育史 第三巻』、331頁。
  - 24) 『長野県教育史 第三巻』、331頁。
  - 25) 『長野県教育史 第三巻』、332頁参照。
  - 26) 『長野県教育史 第三巻』、332頁参照。
  - 27) 前掲、「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」参照。
  - 28) ただし、『長野県教育史』には、「高等女学校専攻科は、中等教員の資格の取得を一つの目的として発足し、昭和二年三月初めて卒業生を出したが、その直前まで教員免許取得上の資格が未定であったため、生徒・父兄の動揺は大きく、松本高女では、専攻科二年生の同盟休校事件が起こり、

二年度入学志願者数も激減した」（『長野県教育史 第三巻』、357頁）と記述されている。

29) 松本高等女学校編『校友会報 第八号』松本高等女学校校友会、昭和11年7月、49頁。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、川口雅昭皇學館大学教授に御指導賜った。また、史料調査にあたり、土井秀夫陽炎堂店主、草間義一郎松信堂店主、国宝旧開智学校校舎の遠藤正教様、川上由紀子様、百瀬也寿之様、加藤史絵様、松本市歴史の里主任学芸員須永瑞希様に御高配・御助言を賜った。ここに謝意を表す。なお、本稿は、中国四国教育学会第73回大会（山口大学・ウェブ開催）「教育史」部会で令和3年11月27日に行った研究報告、「長野県松本高等女学校における卒業生の進路」に修正を加えたものである。